

高等専門学校における異文化理解教育 —「ミニ研究」のデザインと授業実践についての考察—

村松 直子 *

On Intercultural Education in National Institute of Technology: A Consideration about the Design and Practice of a 'Mini Research' Module to Intensify Cultural Awareness

Naoko MURAMATSU *

Key words: intercultural education, intercultural communicative competence, intercultural competence, cultural awareness, active learning

1. はじめに

日頃筆者は沼津工業高等専門学校（沼津高専と略す）で英語を教えているが、本科1年から3年までは高校検定教科書を使用し、学生達にとって初めて学ぶ各文法項目を指導するため、必然的に文法指導に多くの時間をとられる。Communicative Language Teaching（教師と生徒達の間で彼らの学習言語だけでコミュニケーションをしながら当該言語を教える指導法）を用いて、文法指導であろうと、コミュニケーションの指導であろうと、常に学生達が英語のインプット、アウトプット、コミュニケーションができるように心掛けているが、それでも、実際の活きた英語コミュニケーションや英語文化を教える時間は大幅に不足していると言わざるを得ない。

沼津高専では、本科4年、5年でも5年の選択英語科目のうち一教科を除いて、異文化教育の科目が一切ないため、大半の学生達は日本文化と外国文化のコミュニケーション・スタイルや思考方法の違いについては殆ど知識を持たないまま卒業してしまう。沼津という土地柄により、学生達には異文化接触の機会も殆どない。そのため、筆者は常々、本校における異文化理解教育の必要性を痛感している。

そこで、今年度、筆者は沼津高専でも今後正規カリキュラムに異文化理解教育、グローバル教育を施す科目ないしプログラムが導入される可能性を視野に入れ

ながら、2年生必修科目「ミニ研究」（週1回90分授業、半期科目）——本校の全教員が其々自由にテーマを設定し、3名前後の学生たちが同テーマの研究を行う科目である——において、ワークショップ形式で異文化理解教育を実践した。具体的には、異文化コミュニケーション能力の核心にある「文化への気付き」（cultural awareness）を育成することを目標として指導内容や課題を構成した。本稿では、このミニ研究の教育実践と教育効果について考察し、最終的に、高専および高校における異文化教育の効果的な方法について提案する。

本稿の手順としては、第2セクションでは、筆者が実施した「ミニ研究」における異文化教育のアプローチについて、第3セクションでは、同「ミニ研究」の指導項目と指導方法について、第4セクションでは、学生たちの各課題への取り組みと学習成果について、第5セクションでは同「ミニ研究」の改善すべき点と高専の本科生を対象とする異文化教育の方法について論じる。最終セクションでは今回実施したミニ研究の成果を踏まえて、高専における異文化理解教育の意義について考察する。

2. 「ミニ研究」における異文化教育のアプローチ

ミニ研究は学生に分かりやすい表現として「異文化理解」をテーマに掲げたが、筆者はこのミニ研究プログラムを、単なる異文化理解の方法を学ぶためのものとするのではなく、異文化コミュニケーション能力の核心にある「文化への気付き」を意味する“cultural awareness”（Critical cultural awareness と呼ばれる

* 沼津工業高等専門学校

* National Institute of Technology, Numazu
College

こともある)を育成することを目標として構成した。“cultural awareness”という概念は、英語圏では辞書にも載っているが、日本では概念自体があまり知られておらず、定着している訳語もないため、本稿では「文化への気付き」を用いる。文化への気付きとは Byram (1997) の定義によれば、次の通りである³。

Critical cultural awareness/political education (savoir s'engager)

An ability to evaluate critically and on the basis of explicit criteria perspectives, practice and products in one's own and other cultures and countries. (Byram 1997, p.53)

文化への気付きの具体的な目標(能力)とは Byram によれば次のとおりである。

Objectives (ability to):

- (a) identify and interpret explicit or implicit values in documents and events in one's own and other cultures;
- (b) make an evaluative analysis of the documents and events which refers to an explicit perspective and criteria;
- (c) interact and mediate in intercultural exchange in accordance with explicit criteria, negotiating where necessary a degree of acceptance of those exchanges by drawing upon one's knowledge, skills and attitudes.

(Byram 1997, p.53)

上記引用で述べられているように、学生たちが文化への気付きを身に着けるといことは、彼らは様々な物事を前にして、文化からくる「明示的、暗示的価値を特定し、解釈し」なければならないし、「明示的な規範に従って」異文化コミュニケーションを行えなければならない。そうであれば、文化への気付きを育成する教育は、単に知識を得るような受け身的なものでなく、体験的なものでなければ効果が望めないと考え

³異文化コミュニケーション能力あるいは異文化間能力における cultural awareness の機能については、本誌掲載の村松(2017)の第4セクションで論じている。

られる。

そこで、筆者は、授業内のタスク/アクティビティ/ディスカッションの場を組むにあたり、学生達になにかを調べる課題に取り組みながら、自他の文化、価値観、人生観、コミュニケーション様式、行動様式等についての学びを得る方法論も習得できるように工夫した。また、文化について調べる学習のなかでは、学生たちが文化について書物やメディアを通して学習する段階から、彼らが徐々に自身の文化、思考、行動について自己観察、考察する学習段階へと移行できるよう、次の三つの課題を与え、それらがステップを踏むよう構成した。具体的な学習課題については次のセクションで述べる。

3. 「ミニ研究」の指導項目と学習課題

この授業では、担当教員が異文化理解のための枠組みとなる異文化コミュニケーション学の諸概念を説明するとき以外は、基本的に、90分授業15回ならびに授業外学習のすべてをアクティブ・ラーニングの手法——学習者が調べて発表する学習、エッセイを読んできた上でのディスカッション、共同学習、共同発表(ミニ研究発表会のポスター発表)——という構成による授業とした。学生達の毎回の授業のための時間外学習時間は、平均すれば概ね1時間以上であるように見受けられた。

第一ステップの課題:

日本文化と外国文化について、共通点と相違点を調べた上で発表する。

この課題は、ByramのICCモデルにおける“cultural awareness”の教育/学習目標(能力)(Objectives (ability to))のうち‘(a) identify and interpret explicit or implicit values in documents and events in one's own and other cultures’を育もうとするものであった。

なお、三つの課題すべてに共通して、文化を大文字で始まる“Culture”と小文字で始まる“culture”とに分ける Bennet (2008, Cited in 高井 2008) による文化の分類の内、小文字の“culture”、すなわち、「主観的要素の強いもので日常生活に密着し、食文化や話し言葉の文化など人々の思考様式や価値観・世界観に密接に結びついているもの。外国人が外から見てもなかなか認識しづらく、その文化内で長期間生活して初め

て見えてくるもの」(高井訳、高井 2008, p.58)について考察を深めることを目標とした⁴。

第二ステップの課題：

外国人が外国人の目からみた日本人と日本文化について記したエッセイを読み、日頃自分が特に意識せずに実践している日本人としてのものの考え方、コミュニケーション・スタイル、行動様式に目を向け、その背景にどのような文化があるか分析する。また、外国人のそれらにも目を向け、その背景にある文化がどのようなものか、その可能性について考察する。

この課題は、先ほどの Byram の ICC モデルにおける”cultural awareness”を高める教育／学習の目標 (Objectives) のうち ability to ‘(b) make an evaluative analysis of the documents and events which refers to an explicit perspective and criteria’に対応するものである。

この課題で用いたエッセイは、主にコリン・ジョイス著『「ニッポン社会」入門—英国人記者の抱腹レポート』(生活人新書、日本放送出版協会、2006)所収の数編であった。その他に、学生達から別の作家の日本文化論も紹介して欲しいと言われ、参照資料としてアーサー・ピナード著『垂米利加ニモ負ケズ』(新潮文庫、2014)の中の数編も勧めた。『「ニッポン社会」入門』は、2009年に原文(*How to Japan—A Tokyo Correspondent’s Take*)でも出版されている。この本は、英国人ジャーナリストのコリン・ジョイス氏が日本滞在中に『ニューズウィーク日本版』に連載として寄せた日本文化論のコラムを纏めたものである。いずれのコラムにおいてもジョイス氏は日本の風物や日本人の行動をとりあげて、日本文化の核心に迫っている。具体的には、「基礎編：プールに日本社会を見た」と「ガイジンとして：日本社会の「和」を乱せますか?」を読み、学生各自に日本文化と外国文化を比較する視点から、感想、解釈、自身の経験などを述べさせ、時には科目担当者である筆者がファシリテーターを務めるかたちでグループ・ディスカッションへと発展させた。

第三ステップの課題：

⁴ 大文字の“Culture”と小文字の“culture”という概念については、本誌掲載の論文、村松(2017)の第5セクションにおいて詳述した。

日本文化と外国文化の比較研究ならびに自身の日本文化の中での振る舞い・思考方法・言語・非言語コミュニケーション・スタイルについての調べ学習やディスカッションの内容(第一ステップ、第二ステップ)を踏まえて、国際社会あるいは異文化コミュニケーションにおいて日本人はどうすべきか検討し、その内容をポスター発表する。

第一ステップ、第二ステップの課題では、学生達は調べ学習をしたり、エッセイを読んだり、ディスカッションをしたりして、日本文化と外国文化について、人間と文化の関係一般について、どちらかというところの静的な分析、考察をしたといえる。第三ステップでは、その静的な分析、考察を、彼らが国際社会で活躍する未来の可能性へと繋げるため、日本人(学生達自身)は国際社会でなにをすべきか検討して貰った。Byramの“cultural awareness”を高める教育／学習の目標(Objectives)のうち ability to ‘(c) interact and mediate in intercultural exchange in accordance with explicit criteria, negotiating where necessary a degree of acceptance of those exchanges by drawing upon one’s knowledge, skills and attitudes.’を試すことができればよかったのであるが、沼津高専では留学生の数が極めて少なく、日本人学生たちは殆ど異文化交流できる環境にない。そこで、将来、学生達が国際社会で活躍する際に備える課題とした。

4. 学生たちの課題への取り組みと学習成果

このセクションでは、前セクションで述べた課題に対する学生たちの取り組みと学習成果について、学生たちの学習成果やディスカッションの躍動感が最も分かりやすいと思われる場面を取り上げて紹介する。

4. 1. 第一ステップの課題に対する学生達の取り組みと学習成果

第一ステップの課題に取り組む際、学生たちはミニ研究のオリエンテーション(初回授業)で、「文化」は大文字の“Culture”と小文字の“culture”が区分され得るという前知識を与えられぬまま、日本文化と外国文化について各自で書籍やインターネットを使って前もって調べ、次回の授業では人々の暮らしが分かるようにレポートするよう指示を受けた。

履修生達はミニ研究で扱う外国文化をイギリスと南アフリカの二カ国に絞り、食べ物、衣装など、大文字の“Culture”について報告した。学生達は、日本文化

の場合でさえ小文字の“culture”について意識したり、論じたりした経験が殆どなかったようであった。

そこで、筆者は、授業の当初 4 回分ほどは、学生達が持っている思考や議論について述べ、文化についてより深く考察できるように、ファシリテーターとしてディスカッションに参加することに決めた。そして、学生たちが取り上げた大文字の“Culture”—日本の実例は寿司、和食、着物等であった—のなかにも、本来、その文化圏の人々の生き方、価値観、美意識、世界観といった小文字の“culture”が見出せる一例として、和食の懐石料理や和菓子、着物を取り上げ、それらが日本の美意識や精神性を色濃く反映しているとされる茶道や華道と通底することを説明した。このような日本文化の実例を糸口にしながら文化についてディスカッションを重ねるなかで、学生達は三回目の授業くらいから、徐々に小文字の“culture”について考察するコツを掴んでいったように見受けられた。

そのうち、比較的海外体験の多い履修生の一人が、日本の道路は通常は通行するためのものであって、人々は路上では普通は座り込む人がいないし、そこで敷物を敷いて商売したり、仕事をしたりしないが、南アフリカでは、路上において人々はものを売っていたり、パソコンと椅子を持ちだして仕事をしたり、完全に座りこんでくつろいだりするという人々の行動面の比較文化を行った。同学生は、さらに日本と南アフリカの間には、路上や公共の空間における人々の「自由」の在り方が異なるのではないかという問題を提起した。この「自由」の在り方という議題は学生達にとって身近にある切実なものだったようである。このディスカッションをした頃から、「ミニ研究」の授業で学生達が小文字の“culture”を掘り下げる作業、ディスカッションを楽しむ様子、授業を延長したいという希望が増え、互いの忌憚のない意見を述べることのできる場が確立され、色々な発言や切り口が提示されるようになった。

4. 2. 第二ステップの課題に対する学生達の取り組みと学習成果

やがて授業は、上記第一ステップの比較文化を行う課題を一部継続したまま、第 4 週目から第二ステップの課題、すなわち、外国人の目から見た日本文化や日本人の振る舞いについて記したエッセイを読み、日頃自分が特に意識していない日本人としてのものの考え方、行動様式、コミュニケーション・スタイルを客観

視し、その背景にどのような文化があるか分析する課題に移行した。

第二ステップにおける学生達の取り組みの一例として、エッセイ集『「ニッポン社会」入門—英国人記者の抱腹レポート—』所収の一篇、「日本社会の「和」を乱せますか？—ガイジンとして—」を取り上げた時の議論を紹介したい。同エッセイは、外国人が自国の文化のなかで通用する振る舞い方と日本文化のなかで期待されている振る舞い方の間で葛藤を覚え、どのような行動をとるべきか迷う事柄の羅列で構成された一編である。同エッセイにその一例として次の一節が出てくる。

同僚の日本人社員はみな毎晩遅くまで働いている。しかし、あなたは五時までに自分の仕事を片付けた。あなたの国の文化で、またあなたが会社と結んでいる契約では、帰宅しても差し支えない。あなたは会社を出る？それとも少し時間を潰す？あるいは手伝いを買って出る？

(ジョイス 1995, p. 185)

学生達にとって、エッセイを使った文化理解は、自ら資料を探らなければならない第一ステップの作業よりも遙かに意見が出しやすいようであった。ある学生は、学校生活や部活動のなかで、自身の意見が集団全体としての意見とかなり違う時のことに言及し、本当は自身は全く違う意見であるのに、場の空気を読んで一切意思表示せず、周囲に合わせて言動している時の心情について述べ、他の二人が共感した。学生達はそれが日本文化からくるものであることを改めて自覚したり、イギリスではそうではない行動が推奨されることに驚いたりしながら、自文化と異文化についての理解を深めていった。

第二ステップの課題に取り組む中で、履修生のなかから、授業外に毎週 2 時間以上、文化について資料を調べたり、諸文化を比較をして意見を述べたりする学習に取り組み、次回の授業回に、その報告を行う学生も現れた。毎回、筆者がディスカッションに参加したり、ファシリテーションを行ったりしなくても、自らの力だけでディスカッションを行い、思考を深め、課題の解決に向けて熱心に取り組む姿勢が見受けられるようになった。そして、第三ステップの課題についての彼らのポスター発表で明らかとなったことであるが、それぞれが日本文化と外国文化の小文字の“culture”

に関して各自の視点から意義深い学びをしていた。

先の第一ステップの課題との関連でいえば、日本の文化における日本人の自由ということは、ここでも議論が継続された。履修生達にとって、集団のなかで自身が場の空気を読んで、自身の意見を言えなかったり（言わなかったり）、自らの望むよう行動できなかったり（行動しなかったり）することのストレスやプレッシャーに議論が及び、日本でも英語や音楽を通じて入ってくるアメリカやイギリスの文化においてはもっと自由に振る舞えるのではないかという声が挙がった。

筆者のミニ研究を選択履修した時点で、学生達は外国文化のことを知りたいという気持ちや一度海外で生活してみたいという願いを持っていたり、日本文化と外国文化を比較研究したいと思ったりしていたので、もしかすると日本文化の中で日ごろ少し窮屈だとうっすら感じている部分があったのかもしれない。筆者には意外であったが、学生たちは、意思のままに行動できる「自由」の在り方というテーマに時々立ち帰っていた。

ここでは紙幅に限りがあるので「自由」をめぐる議論を取り上げているが、実際は学生達は他の視点からも文化について学んだ。彼らにとって、外国文化における小文字の“culture”を掘り下げる作業には、本国文化における自分たちの小文字の“culture”を掘り下げる作業が支えとなり、またその逆のこともあるということが極めて明確に見て取れた。前セクションで、“cultural awareness”を高めるためには‘self-reflection’を行い、‘reflective knowledge (reflexive knowledge)’が必要であると述べたが、このミニ研究における履修生たちの学びが、全体を通じてまさにそのようなものであった。異文化理解教育の理論が「ミニ研究」の教育実践を通して実証される場に立ち会えたことは、筆者にとって印象的であった。

4. 3. 第三ステップの課題に対する学生達の取り組みと学習成果

第三ステップの課題であった「国際社会あるいは異文化コミュニケーションにおいて日本人は何をすべきか」を考える課題では、筆者が予期しないほど、デスクッションと学生達の学びにおいて大成功だったと思うが、ポスター発表上では残念な結果となった。

筆者は授業 3 回分で、第三の課題に取り組んでもらい、第一ステップから第三ステップまでの三つの課題

についての考察を纏められるだろうと思っていた。例えば、ガーデニングや庭園に見る日本とイギリスと南アフリカの世界観、季節感、美意識などといった纏め方である。しかし、学生たちは、筆者が上記のような具体的な切り口で文化を眺めるよう勧めても、「自由」という概念を柱に比較文化論に繋げようと努力を続けた。そして、「食」と「教育」を「自由」に繋げる資料を本校図書館で探そうとしていた。自分たちがミニ研究の途中で解決したい課題とぶつかり、それを小さな宝物のように扱い、何週間も手放さなかったのである。その点は大変素晴らしかった。

しかし、これこそが人文系の研究の醍醐味であり、落とし穴でもあると言えようが、限られた研究時間の枠のなかで人生を賭けるような野心的なテーマを追究しようとしたら、すぐに時間切れとなる。見方を変えれば、履修生達は、「ミニ研究」を通して、研究とは追究が螺旋状に無限に続くプロセスであり、野心的なテーマに取り組むには用意周到な研究計画と膨大な時間や労力が必要であるという教訓を得ることができたとと言える。

履修生各々が第 13 回授業後に提出した研究活動日誌には、「自由」といっても経済的自由、精神的自由、政治的自由などがあるのでテーマが漠然としすぎている、ポスター発表へ向けてゼロからやり直す必要がある等々のやや途方に暮れた内容が記されていた。筆者は学生達を叱咤激励するとともに、補講を組んだ。

結果的に出来上がったポスター発表の内容は、研究の手順は上手くまとめられていたが、残念ながら履修生一人ひとりが実際に驚き、感動し、納得し、議論していた文化をめぐる学びや思索の精髓が反映されたものとはならなかった。彼ら自身が述べていた通り、彼らは、見出した複雑で、奥深く、多様な側面を持つ個々の文化について 15 分程度のポスター発表で纏めるにあたり、本来は簡単に割り切って語ることでできない文化を時に単純な二項対立的な概念に落とし込んで纏めてしまう傾向が見られた。

5. 今後の「ミニ研究」へ向けて改善すべき点

今後再び「ミニ研究」あるいは別のプログラムを通して高専で異文化理解教育を実施する際に改善すべき点としては、次のことが挙げられる。

第一に、異文化理解にあたって学生達にゼロから特定の文化について調べる第一ステップの課題量を減らし、一方で、学生達から文化に関する“self-reflection”

や“reflective knowledge”を多く引き出すことのできる教材を使用した第二ステップの課題の量を増やすべきであると考え。なぜなら、本校の学生達は異文化理解教育を受けた経験に乏しく、海外旅行や海外生活の経験、異文化交流経験もほぼ皆無である学生が殆どであるので、自身の文化を含めて、文化とは何かということに対する学習準備や予備知識があまりないからである。

第二に、学生達が文化に関する学習を重ね、特定の文化についてポスター発表等に纏める段階では、特定の文化についての学生達の解釈が正しいものであるか否かを教師が確認し、もしその解釈が明らかに誤りである場合は、再び資料にあたり、学習し直す時間と機会を与えることが重要である。それをするためには、担当教員は、学生達が取り上げる外国文化のうちの少なくとも一つに関しては造詣が深くなければならない。なぜなら、学生達は、短時間で課題をこなすために、適切な研究手続きをとらず、特定の文化について表面的な観察から極論へと飛躍して片付けようとする可能性があるからである。学生たちが仮にそのような誤った文化解釈を発表してしまえば、他者に特定の文化に関する先入観や誤解を植え付けることになり、異文化理解教育としては逆効果となってしまうため、注意が必要である。

6. おわりに

日本の学校教育の現状としては、大学やスーパー・グローバル・ハイスクール等の一部の高校を除けば、英語科目のシラバスは文法項目中心に組まれ、授業の大半の時間が文法指導、文法問題、文法訳読方式に充てられているように見受けられる。筆者が教鞭を執る沼津高専の現行カリキュラムでは、英語教育を通して英語の語学力は育成しているが、本稿で論じた「異文化間能力」を育成するためのプログラムは必修化されていない⁵。今回の「ミニ研究」を通して、履修生達がこれまで英語の言語能力を育成する教育以外に、異文化間能力を育てる教育を殆ど受けてこなかったことは

明白であった。

その一方で、異文化理解教育を通して、履修生達がディスカッションを白熱させたり、授業外学習を何時間も続けたりしてその成果を授業で披露する姿は印象的であり、一定程度の教育・学習効果があったと結論付けることができる。高等専門学校でもグローバル化に対応する能力を育成することが強く求められている現在、沼津高専でも、今後異文化理解教育、異文化コミュニケーション学などの教育を積極的に必修科目として取り入れていくことが望ましいと筆者は考える。

引照文献

- Bennet, M. J.: Intercultural Communication: A Current Perspective. In Bennet, M. J. (ed.) Basic Concepts of Intercultural Communication: Selected Readings, Intercultural Press, (1998). Cited and translated in 高井 (2008).
- Byram, M.: Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence, Multilingual Matters, 1997.
- Joyce, Colin. How to Japan—A Tokyo Correspondent's Take. Tokyo: NHK Publishing. (2009).
- アーサー・ビナード: 亜米利加ニモ負ケズ, 新潮社, (2014).
- コリン・ジョイス: 「ニッポン社会」入門—英国人記者の抱腹レポート, 日本放送出版協会, (2006).
- 高井収: 異文化コミュニケーション教育の試み—高コンテクスト文化としての俳句, 言語センター広報 language studies, 16, (2008. 1), pp.57-62.
- 村松直子: 高等専門学校における異文化理解教育—異文化コミュニケーション能力育成のための理論とアプローチ, 沼津工業高等専門学校研究報告, 51, (2017), pp. 75-78.

⁵ 沼津高専の現行カリキュラムでは、5年の選択英語科目「英語講読B」のみ自文化、異文化を理解する能力を高めることもシラバス上の授業目標に含めているが、cultural awareness や異文化間能力等、異文化間で発揮される実践的スキルや能力を育成することをシラバスに掲げている科目は皆無である。